

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別：体育心理学

■ 2023年9月1日(金) 10:00 ~ 11:00 | ■ RY205 良心館 2階 R Y 2 0 5 番教室

体育心理学（奇数演題）／ポスター発表

[03心-ポ-01] 感覚情報制御機能と抑制機能の関連性の検討

*山田 優里奈¹ (1. 奈良女子大学)

[03心-ポ-03] 観察者の性別の違いが速さと正確さの両方を求められる課題のパフォーマンスに及ぼす影響

女性参加者についての検討

*兄井 彰¹ (1. 福岡教育大学)

[03心-ポ-05] 運動終点のバラツキは鉛直上下方向で異なる

*山本 真史¹、荒木 雅信^{2,3} (1. 日本福祉大学大学院スポーツ科学研究科、2. 日本福祉大学、3. 大阪体育大学)

[03心-ポ-07] サッカーにおける首振り行動に関するセンサーベースの検出手法開発の試み

*夏原 隆之¹、國部 雅大²、三枝 巧³、小嶋 岳⁴、松竹 貴大⁵、小井土 正亮²、中山 雅雄² (1. 東京成徳大学、2. 筑波大学、3. 山形大学、4. 筑波大学大学院、5. 大阪公立大学)

[03心-ポ-09] 大学生における運動物体の予測特性の男女比較

*戸枝 美咲¹、山崎 紀春²、永田 直也³、中島 弘毅⁴、新井 健之⁵、竹市 勝⁶ (1. 日本女子大学、2. 順天堂大学、3. 慶応義塾大学、4. 松本大学、5. 高千穂大学、6. 国土館大学)

[03心-ポ-11] アーティスティックスポーツの視聴による観察者の感情生起

*福村 寿華¹、林 大貴¹、宮崎 輝光¹、森 司朗¹、中本 浩揮¹ (1. 鹿屋体育大学)

[03心-ポ-13] 高校期の体育適応感が目標志向性を介して批判的思考態度へ及ぼす影響

*鳥井 淳貴¹、中須賀 巧² (1. 宝塚医療大学、2. 兵庫教育大学)

[03心-ポ-15] 自己調整学習と心理的競技能力の関係

大学生アスリートを対象とした質問紙調査

*藤原 由規¹、土屋 裕睦² (1. 大阪体育大学大学院、2. 大阪体育大学)

[03心-ポ-17] 中学校体育における動機づけ雰囲気がグリッドに及ぼす影響

目標志向性を媒介要因としたモデル検証

*中須賀 巧¹、大橋 充典²、田中 輝海³、阪田 俊輔⁴、山本 浩二⁵ (1. 兵庫教育大学、2. 久留米大学、3. 駿河台大学、4. 横浜商科大学、5. 関西福祉大学)

[03心-ポ-19] 感覚処理感受性と競技パフォーマンスの自己評価との関連

中高生スポーツ選手を対象とした横断的検討

*矢野 康介¹ (1. 国立青少年教育振興機構)

[03心-ポ-21] 情動知能に着目したスポーツ外傷・障害発生と心理的要因の検討

*岡田 誠^{1,2}、中澤 史³ (1. 名古屋女子大学、2. 法政大学大学院、3. 法政大学)

[03心-ポ-23] スポーツ場面におけるコロナに伴ったストレス体験後の心理的成長

セルフ・コンパッションとソーシャルサポートに着目して

*松田 晃二郎¹、相羽 枝莉子²、須崎 康臣³、杉山 佳生⁴ (1. 熊本学園大学、2. 長崎国際大学、3. 島根大学、4. 九州大学)

[03心-ポ-25] 地域スポーツでのボランティア活動に対する親の継続意図と子どもの感謝表出は関係するか？

*久保 昂大¹ (1. 九州栄養福祉大学)

[03心-ポ-27] 日本語版スポーツコミットメント尺度2改訂版の作成

*折茂 紗英¹、高井 秀明² (1. 日本体育大学大学院、2. 日本体育大学)

[03心-ポ-29] 知的障害者eスポーツクラブでの活動が当事者および当事者家族に与える心理・社会的影響に関する探索的検討

*木村 駿介¹、中山 健二郎² (1. 静岡産業大学、2. 沖縄大学)

[03心-ポ-31] 近代五種競技選手の心理特性と射撃のパフォーマンスに関する特徴

*高井 秀明¹、大久保 瞳¹ (1. 日本体育大学)

[03心-ポ-33] 大学生の健康への興味が特性的自己効力感に及ぼす影響

*今野 亮¹、山村 伸² (1. 明治薬科大学、2. 愛知東邦大学)

[03心-ポ-35] 大学一般体育で発揮されるストレスコーピングスキルが日常場面に般化されるプロセス

*阪田 俊輔¹、中須賀 巧²、須崎 康臣³、田中 輝海⁴、松田 晃二郎⁵ (1. 横浜商科大学、2. 兵庫教育大学、3. 島根大学、4. 駿河台大学、5. 熊本学園大学)

[03心-ポ-37] 大学女子サッカーにおける前十字靭帯損傷前後の心理状態の変化と個人差

*雨宮 怜¹、橋本 恵里² (1. 筑波大学、2. ノルディニア北海道)

[03心-ポ-39] 動作が主観的快適度および主観的・客観的覚醒度に及ぼす影響

*高山 彩¹、植木 みさと²、関矢 寛史¹ (1. 広島大学大学院、2. マツダ株式会社)

[03心-ポ-41] 大学テニス選手におけるスポーツ傷害の発生要因に関する検討

心理的競技能力からみた傷害発生について

*田島 勇人¹、和田 太一¹、丸茂 芙樹¹、大門 千紗¹、持田 慶貴¹、高橋 正則² (1. 日本大学大学院、2. 日本大学)

[03心-ポ-43] 女子大学生アスリートの月経に対するイメージと認知的評価が月経周期の身体的・心理的な月経随伴症状に及ぼす影響

女子大学生バレーボール選手を対象として

*菅野 慎太郎¹、小沼 直子²、宮内 育大³、高階 曜衣⁴、松尾 絵梨子³、黒澤 愛² (1. 日本大学松戸歯学部、2. 日本大学薬学部、3. 日本大学スポーツ科学部、4. 日本大学商学部)

[03心-ポ-45] 心理的介入プログラムが個人競技の集団効力感に及ぼす影響

*西川 明花¹、笹場 育子² (1. 立命館大学大学院、2. 立命館大学)

[03心-ポ-47] 大学新入生におけるライフスキル獲得と自尊感情との因果関係の推定

*陳 昱龍¹、藤田 和樹² (1. 京都先端科学大学、2. 大阪大学)

[03心-ポ-49] JISS心理グループの過去20年における個別心理サポートの実態調査

初回来談時のトップアスリートの主訴に着目して

*高橋 由衣¹、早川 琢也²、實宝 希祥¹、近藤 みどり¹、柄木田 健太¹、大西 壮流¹、立谷 泰久¹ (1. 国立スポーツ科学センター、2. 京都先端科学大学)

[03心-ポ-51] スタート局面におけるアルペンスキー選手の心理的特徴

*深見 将志¹ (1. 日本大学商学部)

[03心-ポ-53] 青年期アスリートの自己成長力とソーシャルサポート

アスリート育成における指導者の役割

*片上 絵梨子¹ (1. 共立女子大学)

[03心-ポ-55] 拡張現実下における大きさ-重さ錯覚

*梅森 拓磨¹、渡邊 諒¹、井上 純輝¹、清水 海斗¹、樋口 貴広¹ (1. 東京都立大学大学院人間健康科学研究科)

[03心-ポ-57] 対視覚刺激協調ダイナミクスと相対位相差の関係

*村岡 哲郎¹、竹下 大介² (1. 日本大学経済学部、2. 東京大学)

[03心-ポ-59] 心理的競技能力診断検査(DIPCA.3)を用いたラグビーチームにおける実態調査

*友定 啓仁¹、佐藤 達哉²、笹場 育子² (1. 立命館大学大学院、2. 立命館大学)

[03心-ポ-61] 他者の不安表情の知覚が実践的な運動パフォーマンスに及ぼす影響

*小川 茜¹ (1. 西日本短期大学)

[03心-ポ-63] 不安がパフォーマンスに与える影響

野球競技の制球力に着目して

*有井 大芽¹、早田 剛²、菅生 貴之¹ (1. 大阪体育大学、2. 環太平洋大学)

[03心-ポ-65] ジャグリングにおけるボール軌道視認の重要性

バーチャルリアリティ環境下で実現した3ボールカスケードを対象として

*井上 純輝^{1,2}、渡邊 諒²、清水 海斗²、梅森 拓磨²、樋口 貴広² (1. ソニーグループ株式会社、2. 東京都立大学)

[03心-ポ-67] 注意の種類の違いが強度の異なる有酸素性運動中の身体的きつさに及ぼす影響

*若田部 舜¹、余 浩鑫¹、菅谷 亮介¹、本田 真澄¹、小島 翼¹、林 容市^{1,2} (1. 法政大学大学院スポーツ健康学研究科、2. 法政大学文学部心理学科)

[03心-ポ-69] 野球の審判員における心理的スキルと審判経験年数および年齢との関係

*西貝 雅裕¹、来田 宣幸² (1. 太成学院大学高等学校、2. 京都工芸繊維大学)

[03心-ポ-71] 大学女子バスケットボールの新入生アスリートにおけるシーズン中のストレスとスポーツ傷害発生との関連性

唾液アミラーゼ値と主観的気分を指標として

*東 亜弓¹ (1. 大阪国際大学)

[03心-ポ-73] 打鍵音に埋め込まれたピアニストの打鍵動作

*山寺 由乃¹、池山 洋子²、島 弘幸³、木島 章文² (1. 山梨大学大学院 生命医科学専攻、2. 山梨大学教育学部、3. 山梨大学生命環境学部環境科学科)

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別 | 体育心理学

体育心理学（奇数演題）／ポスター発表

2023年9月1日(金) 10:00 ～ 11:00 RY205 (良心館2階 R Y 2 0 5 番教室)

[03心-ポ-01]感覚情報制御機能と抑制機能の関連性の検討

*山田 優里奈¹ (1. 奈良女子大学)

我々の日常生活やスポーツ活動中における抑制反応は、人間の認知機能にとって不可欠な要素である。抑制反応には、不必要な情報に対して無意識に抑制する「感覚情報制御機能」と動作を行わない・我慢するなどの「抑制機能」という2つの働きがある。本研究では、感覚情報制御機能と抑制機能について、生理指標として脳活動を計測し、それぞれの神経活動の関連性を検討することを目的とした。被験者は一般成人男性28名を対象とした。感覚情報制御機能を評価するため、右手正中神経に対し体性感覚連続刺激を呈示し、体性感覚誘発電位を記録した。各成分の S2（第2刺激）/S1（第1刺激）振幅比を算出した。抑制機能を評価するため、体性感覚刺激 Go/No-go課題を用い、事象関連電位 P300成分の振幅と潜時を算出した。実験の結果、電極 Fzでは N30成分、電極 C3' では P22成分と N60成分において、体性感覚誘発電位の S2/S1振幅比が有意に1.0よりも小さく、感覚情報制御機能が働いたことが示された。体性感覚誘発電位 S2/S1振幅比と P300振幅の関連性について、電極 C3' の N60成分における S2/S1振幅比と、電極 Fzの Go-P300振幅、電極 C3の Go-P300振幅、電極 Fzの No-go-P300振幅は有意な負の相関を示した。そのため、感覚情報制御機能（N60成分）が働く人ほど、抑制機能に関わる神経活動が大きくなることが示された。さらに、体性感覚誘発電位 S2/S1振幅比と P300潜時の関連性について、電極 Fzの N30成分における S2/S1振幅比と、電極 Czの Go-P300潜時、電極 C4の Go-P300潜時は有意な正の相関を示した。そのため、感覚情報制御機能（N30成分）が働く人ほど、抑制機能に関わる神経活動が速くなることが示された。

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別 | 体育心理学

体育心理学（奇数演題）／ポスター発表

2023年9月1日(金) 10:00 ～ 11:00 RY205 (良心館2階 R Y 2 0 5 番教室)

[03心-ポ-03]観察者の性別の違いが速さと正確さの両方を求められる課題のパフォーマンスに及ぼす影響

女性参加者についての検討

*兄井 彰¹ (1. 福岡教育大学)

運動を行う際に観察者が存在すると、パフォーマンスが向上する場合は社会的促進、パフォーマンスが妨げられる場合は社会的抑制と呼ばれる。この観察者の性別が異なるとパフォーマンスへの影響も異なると考えられている。本研究では、女性の参加者を対象に、観察者の性別の違いが速さと正確さの両方が求められる課題のパフォーマンスにどのような影響を与えるかを検討した。本研究では、女性参加者24名に対して、できるだけ速く正確にバスケットボールのフリースローを10回連続で行うように求められた。参加者は異なる日に3つの条件で実験を行い、観察者がいない単独条件、男性の観察者がいる男性観察条件、女性の観察者がいる女性観察条件を設定した。観察者は参加者と面識のない2人で、マスクをしてトレーニングウェアを着用していた。実験の結果、10回のシュート成功回数に有意な差が見られ、男性の観察者がいる場合はシュートの成功回数が少なかった。また、10回のシュートにかかる所要時間は、観察者がいない場合と比較して、男性の観察者がいる場合で短くなった。運動終了後に課題への動機づけを調査したところ、観察者がいる場合の方が動機づけは高かった。さらに、課題への集中度を調査したところ、男性の観察者がいる場合は課題に集中できていなかった。このことから、速さと正確さの両方が求められる課題において、女性の参加者は男性の観察者がいると課題への動機づけは高まる一方で集中力は低下し、速く10回のシュートを終わらせようとして所用時間が短くなり、シュートの成功回数が少なくなると考えられる。この傾向は、同じ課題を男性参加者が行った場合と異なり、女性参加者は、異なる性別の観察者が存在することでパフォーマンスが低下する社会的抑制が見られると考えられる。

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別 | 体育心理学

体育心理学（奇数演題）／ポスター発表

2023年9月1日(金) 10:00 ～ 11:00 RY205 (良心館2階 R Y 2 0 5 番教室)

[03心-ポ-05]運動終点のバラツキは鉛直上下方向で異なる

*山本 真史¹、荒木 雅信^{2,3} (1. 日本福祉大学大学院スポーツ科学研究科、2. 日本福祉大学、3. 大阪体育大学)

スポーツをはじめ、私たちが遂行する運動は常に重力による制約を受けている。鉛直上下方向への運動に関する種々の先行研究は、重力環境下での運動制御において、私たちが筋によるエフォートを最小化するために重力が鉛直下方向へ牽引する作用を活かすことを示唆している。鉛直方向への運動において重力を活かす戦略は、筋出力に伴う運動のバラツキを低減し得る要素のひとつとも考えられる。そこで、本研究では運動のバラツキという観点から、鉛直上下方向のうち重力を活かしやすい方向が存在するかについて検討を行った。本研究では鉛直上下方向へのポインティング運動を実験課題として、運動方向および運動速度が運動終点のバラツキに与える影響に着目した。8名の実験参加者に対して、3種類の速度条件で鉛直上方向および下方向へのポインティング運動を遂行させた。ポインティング運動は、モーションキャプチャシステムにより測定し、標的に対する運動終点のバラツキ（変動誤差）を算出した。その後、変動誤差を従属変数、運動方向（2水準）および速度（3水準）を独立変数として、2要因反復測定分散分析を行った。その結果、有意な交互作用が確認され、高速および中速条件において上方向よりも下方向で変動誤差が有意に大きいことが確認され、低速条件においても下方向で変動誤差が大きい傾向が確認された。また、下方向への運動では低速条件に比べて高速条件で変動誤差が大きい傾向にあることも確認された。これらの結果は、運動のバラツキという観点から考えると、鉛直下方向に比べて上方向への運動で合目的に重力を活かしやすいことを示唆している。

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別 | 体育心理学

体育心理学（奇数演題）／ポスター発表

2023年9月1日(金) 10:00 ～ 11:00 RY205 (良心館2階 R Y 2 0 5 番教室)

[03心-ポ-07]サッカーにおける首振り行動に関するセンサーベースの検出手法開発の試み

*夏原 隆之¹、國部 雅大²、三枝 巧³、小嶋 岳⁴、松竹 貴大⁵、小井土 正亮²、中山 雅雄² (1. 東京成徳大学、2. 筑波大学、3. 山形大学、4. 筑波大学大学院、5. 大阪公立大学)

一流のサッカー選手は、ボールを持っていない時やパスを受ける前に首を振って状況を把握することが報告されている。首振り行動は、目視でその行動をカウントする主観的な分析手法が用いられているが、非効率的かつエラーが発生しやすいという問題を内包している。一方で、モーションセンサー（MS）による計測は、効率的かつ高精度にデータ収集することが可能であり、これらの問題を解決するのに適しているとされている。これまでのところ、フィールドにおいてMSで首振り行動を自動的に検出する標準的な計測・評価手法は確立されていない。そこで本研究では、MSを用いてサッカー選手の首振り行動を計測する手法の開発を試みた。大学生サッカー選手を対象に、6 vs. 6によるゴールゲーム（GG）とボールポゼッションゲーム（BPG）をそれぞれ7分間行った。無作為に選んだサッカー選手2名を分析対象者とし、攻撃時の首振り行動を評価した。センサーベースの分析では、先行研究に基づき125 deg/secを超える縦軸に関する頭部の動きと定義し、ヨ一方向への頭部回転を検出した。また、フィールドでの予備実験に基づき、250 deg/secを超える縦軸に関する頭部の動きと再定義した上で、ヨ一方向への頭部回転を検出した。記述分析では、異なる2人の分析者による主観的分析とその評定者間一致率を算出した。MSにおいて、125 deg/secを基準とした場合の平均首振り回数は、GGで79回、BPGで57.5回であった。250 deg/secを基準とした場合では、GGで35.5回、BPGで29.5回であった。記述分析では、GGで32.5回、BPGで29回であった。評定者間一致率はそれぞれ97%、91%であった。以上から、250 deg/secを基準として縦軸に関する頭部の動きを計測することが、頭部の回数を評価するための適切かつ効率的な方法である可能性が示された。

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別 | 体育心理学

体育心理学（奇数演題）／ポスター発表

2023年9月1日(金) 10:00 ～ 11:00 RY205 (良心館2階 R Y 2 0 5 番教室)

[03心-ポ-09]大学生における運動物体の予測特性の男女比較

*戸枝 美咲¹、山崎 紀春²、永田 直也³、中島 弘毅⁴、新井 健之⁵、竹市 勝⁶ (1. 日本女子大学、2. 順天堂大学、3. 慶応義塾大学、4. 松本大学、5. 高千穂大学、6. 国士舘大学)

【はじめに】学校体育およびスポーツの現場において、物体の運動を予測することは、運動物体の捕捉のために重要な運動能力の1つである。これまでに、男性を対象とした物体の運動予測に関する研究を多く行っており、2021年度に大学生男子20名、女子7名を比較した研究では女子の方が男子よりもトリガー刺激提示時刻の進行方向への位置錯覚量が大きいこと報告している。今回は、被験者を増やして実験を行い、結果の比較を行うことで予測局面の男女の特性について検討する。【方法】被験者は大学生54名（男子29名、女子25名）とし、自作のバーチャルリアリティ環境で実験を行った。運動物体（ボール）が画面左端から右方向へ等速で水平移動し、画面中央から右側に設置した長方形の板（目盛付き）の後ろに隠れるように移動する画像を提示した。ボールが板の後ろに隠れ、一定時間経過後、板の色を変色させた（トリガー刺激）。被験者は、トリガー刺激提示時刻のボールの位置を目盛で回答した（回答位置）。トリガー刺激までの時間は5段階でランダムに提示し、20施行実施した。横軸に遮蔽時間（板の後ろに隠れてからトリガー刺激までの時間）、縦軸に板左端からボールの移動距離を取り、回答位置のプロットから回帰直線を求めて、傾き（距離/時間）を被験者が予測した遮蔽中の運動物体速度（予測速度）とした。縦軸との切片を視覚刺激提示による進行方法への位置錯覚量とした。【結果・考察】男子は予測速度 $4.80 \pm 1.56 \text{ deg/s}$ 、切片 $0.87 \pm 0.55 \text{ deg}$ 、女子は予測速度 $5.38 \pm 1.67 \text{ deg/s}$ 、切片 $1.33 \pm 0.75 \text{ deg}$ という結果となった。男女のt検定をした結果、予測速度は有意な差が認められなかった。切片は有意な差($p < 0.05$)が認められた。先行研究と同様に、女子の方が男子よりもトリガー刺激提示時刻の進行方向への位置錯覚量が大きいことが示唆された。

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別 | 体育心理学

体育心理学（奇数演題）／ポスター発表

2023年9月1日(金) 10:00 ～ 11:00 RY205 (良心館2階 R Y 2 0 5 番教室)

[03心-ポ-11]アーティスティックスポーツの視聴による観察者の感情生起

*福村 寿華¹、林 大貴¹、宮崎 輝光¹、森 司朗¹、中本 浩揮¹ (1. 鹿屋体育大学)

スポーツの魅力の一つは観る者を感動させる点にある。感動は喜びや驚きを含む混合感情と定義されることから、スポーツの魅力を高めるためには、観戦者の感情がどのような要因で生じ、またどのような機序で生起するのかを明らかにすることが有用であると思われる。特に芸術性が評価されるようなアーティスティックスポーツ（AS）では、非言語情報による身体的表現によって他者に感情を生起させることが採点基準としても含まれるため、非言語的情報による感情の生起要因を明らかにすることは、より高いパフォーマンス獲得する上でも重要な知見になると思われる。他者の非言語的な要素（姿勢、動作、感情の表出）の観察によって、観察者に同じ感情が無意識的に生起される現象に情動伝染 (emotional contagion) がある。本研究では、特に、身体動作による観察者の感情生起に焦点を置き、ASの視聴においても同様の現象が生起するのかを検証した。実験課題では、参加者に、アーティスティックスイミング競技選手による演技の動画 (30映像) を観察させ、観察後に自己に生起した感情を回答させた。感情に関する回答は、感情価 (ポジティブ-ネガティブ) と覚醒度 (低い-高い) をそれぞれ9段階で回答させ、感情の円環モデルに従い生起感情を評価した。また、映像の表現する感情を選択する課題も行った。結果として、観察者は、演技者が表現しようとする感情 (喜びと怒り) を正確に回答することができた。これに加え、感情価と覚醒度に基づく評価では、演技者が表現した感情に観察者の感情が偏向していた。これらは、演技者の身体表現は、観察者がその表現感情を理解できるだけでなく、観察者の感情そのものを同質なものへと変化させる可能性が示唆された。

体育心理学（奇数演題）／ポスター発表

2023年9月1日(金) 10:00 ～ 11:00 RY205 (良心館2階 R Y 2 0 5 番教室)

[03心-ポ-13]高校期の体育適応感が目標志向性を介して批判的思考態度へ及ぼす影響

*鳥井 淳貴¹、中須賀 巧² (1. 宝塚医療大学、2. 兵庫教育大学)

本研究は、高校期の体育適応感が目標志向性を媒介し、批判的思考態度へどのような影響を与えるのかについて検討することを目的とした。調査は大学1年生157名（男性128名、女性29名）を対象に、体育適応感尺度（佐々木，2003）を独立変数、目標志向性尺度（藤田，2009）を媒介変数、批判的思考態度尺度（平山・楠見，2004）に従属変数とした仮説モデルを設定し、共分散構造分析によってモデル妥当性の検討を行った。まず、モデルのデータへの適合度は全ての指標において基準を満たす値が得られた（GFI=. 983, AGFI=. 943, CFI=. 999, RMSEA=. 016）。次に、有意なパス係数について述べる。連帯志向は、自我志向性（ $\beta = .25$ ）を介して論理的思考への自覚（ $\beta = .23$ ）、客観性（ $\beta = .23$ ）、証拠の重視（ $\beta = .22$ ）に正のパスを示した。他者と協同して体育活動を好む者は、他者比較によって自己の有能さを高めるため、あるいは勝つためのゲームプランを検討することによって、批判的思考を発揮しているのではないかと推察する。また、連帯志向および体育適応は、それぞれ課題志向性（順に $\beta = .26$, $\beta = .40$ ）を介して論理的思考への自覚（ $\beta = .16$ ）、探求心（ $\beta = .37$ ）、客観性（ $\beta = .22$ ）に正のパスを示した。体育適応感を高めることは、協力することや自己のベストを発揮することへの重要性を理解させるとともに、このような思考プロセスが批判的思考を育むのではないかと推察する。一方で、体育適応感から批判的思考態度への直接的なパスは確認されなかった。以上より、高校期の体育適応感は目標志向性を媒介し、間接的に大学生の批判的思考態度へ影響していることが示唆された。このことは、高校期の体育授業における適応感（特に連帯志向）を高めることは、個々の達成目標に応じて批判的思考態度を包括的に高めることが可能と考えられる。

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別 | 体育心理学

体育心理学（奇数演題）／ポスター発表

2023年9月1日(金) 10:00 ～ 11:00 RY205 (良心館2階 R Y 2 0 5 番教室)

[03心-ポ-15]自己調整学習と心理的競技能力の関係

大学生アスリートを対象とした質問紙調査

*藤原 由規¹、土屋 裕睦² (1. 大阪体育大学大学院、2. 大阪体育大学)

【目的】本研究は大学生アスリートの自己調整学習と心理的競技能力の関係を明らかにすることを目的とした。【方法】調査は体育系大学に所属する大学生（男性173名、女性66名）の競技継続者を対象とした。調査内容は、フェイスシート（学年、競技種目、性別）、スポーツ版自己調整学習尺度（幾留ほか, 2017）、心理的競技能力診断検査（株式会社トーヨーフィジカル）であった。分析方法は、スポーツ版自己調整学習尺度の5下位尺度（計画、自己効力感、セルフモニタリング、エフォート、評価・内省）と、心理的競技能力診断検査の5因子（競技意欲、精神の安定・集中、自信、作戦能力、協調性）について Pearsonの積率相関係数を用いた相関分析を行った。分析に SPSS27.0.1 (IBM社製, SPSS Statistics) を使用し、統計学的な有意水準は5%とした。【結果と考察】自己調整学習の5下位尺度と心理的競技能力の「競技意欲」に有意な正の相関（ $r \geq .40$ ）が認められた。また、自己調整学習の「計画」と心理的競技能力の「協調性」、自己調整学習の「自己効力感」と心理的競技能力の「自信」「作戦能力」、自己調整学習の「エフォート」と心理的競技能力の「協調性」、自己調整学習の「評価・内省」と心理的競技能力の「作戦能力」「協調性」に有意な正の相関（ $r \geq .40$ ）が認められた。その他の自己調整学習の下位尺度と心理的競技能力の因子に有意な正の相関（ $r \geq .20$ ）が認められた。しかし、自己調整学習の5下位尺度と「精神の安定・集中」に有意な相関が認められなかった。この結果から、練習の質は試合場面において重要であることが示唆された。しかし、試合で精神をコントロールする能力には別の要因がある可能性が示唆されたため、今後も検討していく必要がある。

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別 | 体育心理学

体育心理学（奇数演題）／ポスター発表

2023年9月1日(金) 10:00 ～ 11:00 RY205 (良心館2階 R Y 2 0 5 番教室)

[03心-ポ-17]中学校体育における動機づけ雰囲気グリッドに及ぼす影響

目標志向性を媒介要因としたモデル検証

*中須賀 巧¹、大橋 充典²、田中 輝海³、阪田 俊輔⁴、山本 浩二⁵ (1. 兵庫教育大学、2. 久留米大学、3. 駿河台大学、4. 横浜商科大学、5. 関西福祉大学)

本研究の目的は、体育授業における動機づけ雰囲気、目標志向性、グリッドの関係について検討することである。目的を遂行するために、独立変数に動機づけ雰囲気（熟達雰囲気・協同雰囲気・成績雰囲気）、媒介変数に目標志向性（課題志向・成績接近志向・成績回避志向）、従属変数にグリッド（根気・一貫性）としたモデルを設定し、そのモデル妥当性について検討した。中学生を対象に質問紙調査を実施し、回答に欠損のない1201名のデータを分析に用いた。共分散構造分析の結果、適合度指標は基準値を満たす値であった。まず動機づけ雰囲気からグリッドへの直接効果のパスは、協同雰囲気と成績雰囲気が根気に正の影響を示した。これは協同雰囲気や成績雰囲気は直接的にグリッドの向上に寄与することを示唆している。続いて、動機づけ雰囲気とグリッドに目標志向性を媒介した間接効果のパスは、以下のとおり3点が明らかとなった。①熟達雰囲気と協同雰囲気は課題志向に正の影響を示し、その課題志向は根気と一貫性に正の影響を示した。②熟達雰囲気と成績雰囲気は成績回避志向に正の影響を示し、その成績回避志向は根気と一貫性に負の影響を示した。これらは熟達雰囲気や協同雰囲気の認知は課題志向を高め、そして課題志向の高まりがグリッドを促進させるが、その一方で、熟達雰囲気や成績雰囲気の認知は成績回避志向を高め、その成績回避志向の高まりがグリッドを低下させることを示唆している。③熟達、協同、成績雰囲気から成績接近志向に正の影響を示し、成績接近志向は根気に正の影響を示した。これは、熟達、協同、成績雰囲気の認知が成績接近志向を高め、成績接近志向の高まりによって根気が強まることを示唆している。以上のことから、総じて協同雰囲気を強調することがグリッド向上に有効であることが考えられる。一方、熟達雰囲気と成績雰囲気には生徒のグリッドの向上・抑制の二面性があることが示唆された。

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別 | 体育心理学

体育心理学（奇数演題）／ポスター発表

2023年9月1日(金) 10:00 ～ 11:00 RY205 (良心館2階 R Y 2 0 5 番教室)

[03心-ポ-19]感覚処理感受性と競技パフォーマンスの自己評価との関連

中高生スポーツ選手を対象とした横断的検討

*矢野 康介¹ (1. 国立青少年教育振興機構)

【背景と目的】

近年の心理学領域において、種々の刺激に対する情報処理の深さや、環境要因からの被影響性を表す特性である、感覚処理感受性が注目を集めている（以下、感受性と略記；Aron et al., 2012）。スポーツ心理学の文脈では、感受性の高い個人は、競技の継続年数が短いことや（矢野ほか，2017）、バーンアウト傾向の高いことが示されているものの（上野・平野，2016）、競技パフォーマンスとの関連についての実証的研究は見受けられない。

そこで本研究では、競技パフォーマンスに対する感受性の関連を検討することで、感受性が高いスポーツ選手の特徴に関する基礎的知見を蓄積することを目的とした。

【方法】

日本の中学校または高校の運動部活動に所属するスポーツ選手187名を対象に、インターネット調査を実施し、（男性116名、女性71名；平均15.0±1.7歳）所属部活動、感受性の程度（岐部・平野，2019）、競技パフォーマンスの自己評価（上野・小塩，2016）について回答を依頼した。調査の実施にあたり、発表者の所属機関の倫理審査委員会より承認を得た。

本研究の目的に沿い、競技パフォーマンスの自己評価を目的変数とした階層的重回帰分析を実施した。説明変数は、Step 1で、学年およびダミー変数化した性別と競技種目を（上野ほか，2018）、Step 2で感受性を投入した。分析には、統計解析ソフト HAD18.00（清水，2016）を使用し、有意水準は5%に設定した。

【結果と考察】

分析の結果、Step2において、感受性は競技パフォーマンスに対して、正の有意な関連を持つ傾向のあることが示された。したがって、学年や性別、競技種目に係わらず、感受性の高いスポーツ選手は、自身のパフォーマンスを高く評価する傾向にあることが示唆された。今後は、両者の関連について、詳細なメカニズムを明らかにしていくことが求められる。

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別 | 体育心理学

体育心理学（奇数演題）／ポスター発表

2023年9月1日(金) 10:00 ～ 11:00 RY205 (良心館2階 R Y 2 0 5 番教室)

[03心-ポ-21]情動知能に着目したスポーツ外傷・障害発生と心理的要因の検討

*岡田 誠^{1,2}、中澤 史³ (1. 名古屋女子大学、2. 法政大学大学院、3. 法政大学)

【目的】大学生アスリートを対象としたスポーツ外傷・障害発生と情動知能の関係の検討。【対象と方法】大学生アスリート402名（男性283名、女性119名：平均年齢 19.5 ± 1.2 歳）に対してアンケート調査および情動知能尺度（以下：EQS 内田、2001）を実施した。アンケート調査ではスポーツ歴およびスポーツ外傷・障害の有無とその診断名について確認し、スポーツ歴から接触競技と非接触競技、診断名からスポーツ外傷とスポーツ障害をそれぞれ分類した。EQSは対応因子と領域の12項目（全33項目）を採用し、以下の検討を実施した。①全対象者、接触競技、非接触競技についてスポーツ外傷・障害あり群となし群の差の検定（t検定）。②スポーツ外傷・障害に影響を及ぼす因子を抽出するために、従属変数をスポーツ外傷・障害の有無、独立変数を2群間で有意差の認められた因子とした多重ロジスティック回帰分析。③受傷機転による差異を検討するため、スポーツ外傷群、スポーツ障害群、なし群の3群間での多変量解析。統計処理は統計ソフト HAD（清水、2016）を使用した。なお、本研究は本学倫理審査委員会の承認（2022__01）を得て実施した。【結論】スポーツ外傷・障害あり群228名、なし群174名であった（有病率56.7%）。2群間のEQS各因子の比較では、「自己洞察」「共感性」「愛他心」「状況洞察」「状況コントロール」でスポーツ外傷・障害あり群で低値となった（ $p < 0.05$ ）。また、多重ロジスティック回帰分析の結果、「愛他心」「状況洞察」がスポーツ外傷・障害発生に影響を及ぼす因子として抽出された。受傷機転による多変量解析では、3群間で「自己洞察」「愛他心」「状況洞察」について差が認められた。以上からスポーツ外傷・障害発生の発生には複数の情動知能の因子が関与している可能性が示唆された。

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別 | 体育心理学

体育心理学（奇数演題）／ポスター発表

2023年9月1日(金) 10:00 ～ 11:00 RY205 (良心館2階 R Y 2 0 5 番教室)

[03心-ポ-23]スポーツ場面におけるコロナに伴ったストレス体験後の心理的成長

セルフ・コンパッションとソーシャルサポートに着目して

*松田 晃二郎¹、相羽 枝莉子²、須崎 康臣³、杉山 佳生⁴ (1. 熊本学園大学、2. 長崎国際大学、3. 島根大学、4. 九州大学)

1. 背景

新型コロナウイルス感染症 (以下、コロナ) のパンデミックの影響は、日常生活場面だけでなくスポーツ界にまで及び、数多くのスポーツイベントの延期や中止、練習や仲間との交流の制約などの未曾有の事態を招き、スポーツ実施者の心身にも大きな影響を与えた。一方、コロナに伴った多様なストレス体験を契機に、肯定的な心理的変容を遂げる個人の存在も確認されている (e.g., Van der Hallen & Godor, 2022)。しかし、コロナ禍におけるスポーツ特有のストレス体験とスポーツ実施者の成長との関連を検討した研究はほとんどない。本研究では、先行研究においてストレス関連成長との関連性が示されているセルフ・コンパッションとソーシャルサポートに着目し、スポーツ場面におけるコロナに伴ったストレス体験後の成長に関連する要因を検討することを目的とした。

2. 方法

1) 対象者と手続き 調査は、株式会社クロス・マーケティングに委託し、18～60歳のスポーツ実施者1275名（平均年齢41.1±11.06歳、男性741名、女性531名、その他3名）を対象に実施した。調査は、筆頭著者の所属機関における倫理委員会の承認を得て実施された。

2) 主な調査内容 人口統計学的変数、セルフ・コンパッション反応尺度 (宮川・谷口, 2016)、ソーシャルサポート尺度 (土屋・中込, 1994)、スポーツ選手用ストレス関連成長尺度 (煙山・尼崎, 2016)

3. 結果と考察

セルフ・コンパッションとソーシャルサポートを説明変数、ストレス関連成長を目的変数として重回帰分析を行った結果、2つの説明変数が、ストレス関連成長に対して正の影響を及ぼしていた。これらの結果より、コロナ関連のスポーツ特有のストレスフルな出来事に直面した際に、自分に対して慈しみの気持ちを向け、周囲からの支援に満足をしている者ほど、肯定的な心理的変容が促進されている可能性が示唆された。

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別 | 体育心理学

体育心理学（奇数演題）／ポスター発表

2023年9月1日(金) 10:00 ～ 11:00 RY205 (良心館2階 R Y 2 0 5 番教室)

[03心-ポ-25]地域スポーツでのボランティア活動に対する親の継続意図と子どもの感謝表出は関係するか？

*久保 昂大¹ (1. 九州栄養福祉大学)

先行研究では、地域スポーツでのボランティア活動に対する親の継続意図と関係する要因が検討されてきた（大橋ほか，2022）。一連の研究によって、満足感や楽しさといった地域スポーツでの親のポジティブな感情が継続意図と正の関係を持つことが示されてきた（元嶋・杉山，2022）。一方で、地域スポーツでのどのような体験が、親の継続意図と正の関係を持つのかは明らかとなっていない。地域スポーツでのボランティア活動を親が快く継続しようと思える環境を構築するためには、親の継続意図を高めるような具体的な体験を明らかにすることは重要だろう。そこで、本研究では、親の継続意図と正の関係を持つと考えられる具体的な体験として、子どもの感謝表出に焦点を当てる。そして、この子どもからの感謝表出と親の継続意図との正の関係を、地域スポーツに参加する子どもを持つ母親を対象とした横断調査によって検証した。本研究では、オンライン調査会社のマイボイスコムを利用してオンライン調査を実施した。まず、8歳から12歳の子どもをもつ母親5000名を対象に調査協力を依頼した。そして、5000名の対象者のうち、地域スポーツに参加する子どもを持つ母親400名（平均年齢＝27.0歳，標準偏差＝5.0歳）に調査を実施した。親の継続意図得点を目的変数とした重回帰分析を実施したところ、自身の子どもの感謝表出得点の標準化偏回帰係数は、 $\beta = .310$ で有意であった。このことから、子どもが参加する地域スポーツでのボランティア活動に対する親の継続意図と、子どもの感謝表出との間に正の関係があることが示された。地域スポーツでのボランティア活動を親が快く継続するためには、親がボランティア活動をしてくれていることに対して子どもが感謝を表出することが効果的であることが示唆された。

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別 | 体育心理学

体育心理学（奇数演題）／ポスター発表

2023年9月1日(金) 10:00 ～ 11:00 RY205 (良心館2階 R Y 2 0 5 番教室)

[03心-ポ-27]日本語版スポーツコミットメント尺度2改訂版の作成

*折茂 紗英¹、高井 秀明² (1. 日本体育大学大学院、2. 日本体育大学)

スポーツコミットメントとは「スポーツ参加を続ける願望と決心を表している心理上の概念」であり（Scanlan et al., 1993）、スポーツに参加することで、次第にスポーツコミットメントが形成され、スポーツ実施の継続につながるといわれている（金崎, 1992）。Scanlan et al. (2016) によって、これまでにスポーツコミットメント尺度2（以下 SCQ-2）が作成され、様々な言語でその因子構造が確認されている。折茂・高井（2022）は日本語版の SCQ-2 を作成してその因子構造を確認しているが、コミットメントに関する因子が削除されているため、その内容には再検討の余地があるだろう。そこで、本研究においては日本語版の SCQ-2 について、原版を参考に因子構造を考慮した再度因子分析を実施し、下位尺度間の関連について検討することとした。本研究では折茂・高井（2022）で利用した283名（男性136名，女性147名，平均年齢 20.35 ± 0.52 歳）のデータを活用し、再分析を行った。探索的因子分析で8因子24項目が得られ、確認的因子分析で十分な値が確認された。なお、原版の下位尺度であった「価値ある機会」「社会的制約」「社会的サポートー情緒的」は本尺度から削除された。次に、日本語版 SCQ-2 における下位尺度間の共分散構造分析を行ったところ、十分な適合度の値を示した。また、「卓越への願望」「スポーツの楽しさ」「その他の優先事項」「個人的投資ー損失」は「熱狂的コミットメント」に対して有意な正の影響を与えた。「その他の優先事項」「個人的投資ー損失」は「強制的コミットメント」に対して有意な正の影響を与え、「スポーツの楽しさ」は「強制的コミットメント」に対して有意な負の影響を与えた。また、スポーツコミットメントにおける大学生アスリートの特徴としては、男女間で有意差はみられなかった。

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別 | 体育心理学

体育心理学（奇数演題）／ポスター発表

2023年9月1日(金) 10:00 ～ 11:00 RY205 (良心館2階 R Y 2 0 5 番教室)

[03心-ポ-29]知的障害者 eスポーツクラブでの活動が当事者および当事者家族に与える心理・社会的影響に関する探索的検討

*木村 駿介¹、中山 健二郎² (1. 静岡産業大学、2. 沖縄大学)

知的障害者の抱える心理社会的な課題として、コミュニケーションや生活行動といった日常生活を送る上で必要なスキルの低さ、それに伴うメンタルヘルスの低下リスクが挙げられる。また当事者家族においても、将来への不安や日々のケアに起因する負担感の大きさから、心理社会的な支援が必要となることが指摘されている。そこで本研究では、当事者の楽しさや居場所の創出に寄与すると期待できる活動として知的障害者 eスポーツクラブに着目した。知的障害者 eスポーツクラブの中では、eスポーツだけではなく参加者同士の交流や、eスポーツのトレーニングをはじめとした様々な体験をすることで、心理社会的スキルの向上やメンタルヘルスの維持・改善に寄与することが期待される。加えて、当事者家族にとってもレスパイトケアやピアサポートの場としても機能することが考えられる。以上より本研究では、知的障害者 eスポーツクラブに参加する当事者の家族にインタビュー調査を実施し、知的障害者 eスポーツクラブに参加する効果の探索的検討を目的とした。本研究の調査協力者は、eスポーツクラブに参加している当事者の保護者4名であった。調査は半構造化インタビューを実施し、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いて分析を行った。分析の結果、eスポーツクラブでの経験を経て当事者が認知・行動スキルの獲得や居場所の獲得、余暇時間の獲得をしていることが示唆された。また、保護者自身にもレスパイトケア、ピアサポートといった効果を有していることが示唆された。しかし、本研究はまだ理論的飽和に至っていない点が課題に挙げられる。今後は、理論的飽和を目指してデータの知見の蓄積を進めるとともに、当事者の変化を直接観察するような参与観察といった多面的な調査を行うことで、知的障害者 eスポーツクラブの持つ機能についてより深く検討を行うことが求められる。

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別 | 体育心理学

体育心理学（奇数演題）／ポスター発表

2023年9月1日(金) 10:00 ～ 11:00 RY205 (良心館2階 R Y 2 0 5 番教室)

[03心-ポ-31]近代五種競技選手の心理特性と射撃のパフォーマンスに関する特徴

*高井 秀明¹、大久保 瞳¹ (1. 日本体育大学)

近代五種競技の射撃は、600 m走と射撃を繰り返すため、静と動が混在する種目である。ときに、まわりの観衆や自他のパフォーマンスが気になり、実力発揮できないことに苦慮する選手がいる。本研究では、心理特性である競技特性不安と注意スタイルに着目し、射撃のパフォーマンスに関する特徴について明らかにすることを目的とした。調査対象者は、近代五種全日本選手権大会の決勝に出場した選手25名（男性15名、女性10名）であった。調査内容は、年齢、性別、競技年数、スポーツにおける競技特性不安尺度（橋本ほか、1993）、注意・対人スタイル診断テスト（Nideffer, 1976）とした。また、パフォーマンスについては、近代五種全日本選手権大会の射撃の弾数、射撃の1発目までの時間、射撃の合計時間を評価した。その結果、競技特性不安における高群の射撃の1発目までの時間は、低群よりも有意に短かった。また、OET（External overload）の高群の射撃の1発目までの時間は、低群よりも短い傾向を示した。OETの高群の射撃の合計時間は、低群よりも有意に短かった。そして、OIT（Internal overload）の高群の射撃の合計時間は、低群よりも有意に短かった。一般的に、OETとOITが高得点である場合は、外界の情報によって混乱することやオーバーロードになることで失敗を犯しやすい傾向があり、一度に多くのことを考えすぎて失敗しやすいといわれている（e.g., 杉山、2007；大久保、2011）。OETとOITの高群は、低群よりもパフォーマンスが低いものと予想されたが、本研究では異なる結果を示した。これは、選手自身が個人の競技特性不安や注意スタイルの特徴を理解した上で、射座に入る人数やレース展開を想定して日頃からの練習に取り組んでいることが関係しているものと考えられる。

体育心理学（奇数演題）／ポスター発表

2023年9月1日(金) 10:00 ～ 11:00 RY205 (良心館2階 R Y 2 0 5 番教室)

[03心-ポ-33]大学生の健康への興味が特性的自己効力感に及ぼす影響

*今野 亮¹、山村 伸² (1. 明治薬科大学、2. 愛知東邦大学)

本研究の目的は、大学生の特性的自己効力感（以下、GSE）尺度の因子構造に関する新たな知見を得ることを通して、健康への興味がGSEに及ぼす影響を明らかにすることであった。調査対象者は大学生の男子139名、女子233名、計372名（平均年齢＝18.32±.79歳）であった。調査はGSE尺度、健康への興味（自身の現在、及び20年後）について回答が行われた。分析は、まず探索的因子分析（最尤法、プロマックス回転）により2因子13項目が抽出された。次に、探索的因子分析によって得られた2因子13項目のモデルに検証的因子分析（最尤法、プロマックス回転）を行ったところ、GFI=.919、AGFI=.884、CFI=.886、RMSEA=.076であり、因子構造モデルの適合度は許容範囲内であると判断された。その後、GSE下位尺度を従属変数、性と健康への興味を独立変数とする二元配置分散分析が行われた。

大学生におけるGSE尺度は第1因子「問題解決」、第2因子「対人関係」の2因子構造であることが明らかとなり、その信頼性・妥当性が検証された。また、GSE下位尺度との関連が有意であったことから、現在の健康への興味の程度が高ければGSE得点が有意に高いことが確認された。「問題解決」においては、男子より女子の方が有意に高い結果であった。20年後の健康への興味は、「問題解決」においては「1. 健康でいるか興味がない」を選択した場合は女子の得点が男子より有意に高かった。また、男子では20年後の健康への興味の程度との関連が有意であった。「対人関係」においては、20年後の健康への興味の程度と有意な関連が認められた。以上から、大学生に対して保健体育実技や講義などの授業において健康に対する興味や関心を持たせるアプローチは彼らのGSEを育むための効果的な手立ての一つとなり得ることが示された。

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別 | 体育心理学

体育心理学（奇数演題）／ポスター発表

2023年9月1日(金) 10:00 ～ 11:00 RY205 (良心館2階 R Y 2 0 5 番教室)

[03心-ポ-35]大学一般体育で発揮されるストレスコーピングスキルが日常場面に般化されるプロセス

*阪田 俊輔¹、中須賀 巧²、須崎 康臣³、田中 輝海⁴、松田 晃二郎⁵ (1. 横浜商科大学、2. 兵庫教育大学、3. 島根大学、4. 駿河台大学、5. 熊本学園大学)

【背景】大学生の長期的なメンタルヘルス維持・向上を期待し、大学一般体育におけるストレスマネジメント教育が実施されているが、授業で実施されるストレスコーピングがどのように日常に般化されるか明らかにされていない。本研究では、授業内外で実施される問題焦点型コーピング（以下 PSC）を経時的に測定し、般化の有無及びどのようなプロセスで般化されるのか明らかにすることを目的とした。【方法】2022年5月～7月に4年制大学にて、3回の縦断的な質問紙調査を実施した。3回すべてに回答した155名（平均年齢18.30±.64）を分析対象とした。調査内容は大学一般体育授業内に実施される PSC4項目、授業外で実施される PSC4項目、対処資源（体力、自尊感情、ソーシャルキャピタル、情報活用能力各5項目）20項目であった。【結果】授業前半、中盤、後半における授業内で実施される PSCと授業外で実施される PSCについて交差遅れ効果モデルを用いて般化プロセスを確認した。その結果前半・授業外 PSCから中盤・授業内 PSC（ $\beta = .32$, $p < .01$ ）、中盤・授業外 PSCから後半・授業外 PSC（ $\beta = .40$ $p < .01$ ）という正の循環的な関係が確認された。また、中盤の全ての対処資源は後半の授業内外の PSCに正の影響を持つこと（授業内 PSCに対して、 $\beta = .16$ -.31、 $p < .05$ ；授業外 PSCに対して、 $\beta = .20$ -.32、 $p < .05$ ）、授業後半の全ての対処資源は中盤・授業内 PSCから正の影響を受けること（ $\beta = .14$ -.19、 $p < .05$ ）が確認された。【考察】PSCは授業外の日常的な場面での発揮を起点とし、相互に関連し般化すること、対処資源は授業中盤以降に PSCの般化を促進することが示唆された。以上から、授業前半は特に対処資源の獲得に注力し、中盤以降に般化に対する教示を行うことが望ましいと考えられる。

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別 | 体育心理学

体育心理学（奇数演題）／ポスター発表

2023年9月1日(金) 10:00 ～ 11:00 RY205 (良心館2階 R Y 2 0 5 番教室)

[03心-ポ-37]大学女子サッカーにおける前十字靭帯損傷前後の心理状態の変化と個人差

*雨宮 怜¹、橋本 恵里² (1. 筑波大学、2. ノルディーマ北海道)

本研究の目的は、大学女子サッカー選手を対象として、ACL損傷初発時における心理状態の変動過程のタイプを明らかにし、受傷の予後が悪いタイプの特徴について、リハビリ時のソーシャルサポートに注目して検討することであった。

研究対象者は、過去にACL損傷を経験し、現在復帰している大学女子サッカー選手91名（平均年齢＝20.08歳、SD＝±1.16）とした。回顧式の質問紙調査を行い、上野・小塩（2014）を参考とした、ACL損傷初発時の受傷前から受傷直後、リハビリ前期と中期、復帰後などを含む6時点にわたる心理的状态：興奮度合いの変動を記載するグラフ（以下、心理的変動グラフと記述）を記入するよう依頼した。また、リハビリ時の周囲の者からの支援について測定するために、Social Support Questionnaire for Injured Athlete（Katagami et al, 2020）への回答を求めた。

心理的変動グラフのデータをもとに階層的クラスタ分析を行った結果、ACL損傷前から復帰までの心理状態の変動タイプとして、「受傷後興奮型」、「受傷前興奮型」、「受傷予後不調型（ACL損傷時から復帰の時点にかけて心理状態：興奮度合いが下がっている）」、「ACL損傷時興奮型」の4つに分けられた。次に、「受傷予後不調型」とその他のクラス間におけるソーシャルサポートの差異について検討した結果、「受傷予後不調型」は、他のクラスよりも回復・復帰サポートの得点が有意に低いことが確認された（ $p < .05$, $d = .78$ ）。

以上、本研究の結果により、ACL損傷初発時において、大学女子サッカー選手が経験する心理的な状態の変動には4つのタイプがあることや、受傷後の予後が不良な選手の特徴が明らかとなった。今後、このような特徴を有する選手に対する支援が、ACL損傷発生時の良好な予後に繋がる可能性がある。

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別 | 体育心理学

体育心理学（奇数演題）／ポスター発表

2023年9月1日(金) 10:00 ～ 11:00 RY205 (良心館2階 R Y 2 0 5 番教室)

[03心-ポ-39]動作が主観的快適度および主観的・客観的覚醒度に及ぼす影響

*高山 彩¹、植木 みさと²、関矢 寛史¹ (1. 広島大学大学院、2. マツダ株式会社)

感情のコントロール方法として、身体心理学の領域で動作や姿勢による心理・生理的效果が報告されている（春木・山口，2015）。また、2次元感情モデル（Russell，1980）によると、感情は高覚醒・快、不快、低覚醒・快、不快の4カテゴリーに分類でき、中でも快感情は心身の健康に良い効果をもたらす（Pettit et al., 2001）。そこで、動作が主観的快適度および主観的・客観的覚醒度に及ぼす影響を明らかにすることを目的とした。実験には大学生30名（男性16名，女性14名； $M_{age}=19.37\pm0.91$ ）が参加した。動作は、リズムジャンプ動作（M1）、脇を開閉させる動作（M2）、肩の力を抜く動作（M3）、腕組みをして頷く動作（M4）の4種類を用いた。実験手順として、まず実験参加者に安静時の Affect Grid（菅原ほか，2015）の回答を求めた。その後、動作を1分間実施させ（20秒×3）、動作後に再び Affect Gridの回答を求めた。これを4試行繰り返し、動作中の心拍数を測定した。結果として、すべての動作において、客観的覚醒度である心拍数は安静時と比較し上昇した（ $p<.05$ ）。また、主観的指標について、Affect Gridの原点（5,5）をニュートラル感情とした時、M1は高覚醒な動作（ $p<.001$ ）と示され、安静時から快適度を低下させ（ $p<.001$ ）、覚醒度を上昇させた（ $p<.001$ ）。M2は高覚醒・快な動作（ $p<.01$ ）と示され、安静時から覚醒度を上昇させた（ $p<.001$ ）。また、M3、M4はどちらも快な動作（ $p<.01$ ）と示された。以上のことから、特に M2、M3、M4はニュートラル感情との比較において主観的快適度が有意に高く、これらの動作を1分間実施することで快感情を導き、心身の健康に良い効果がもたらされることが示唆された。

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別 | 体育心理学

体育心理学（奇数演題）／ポスター発表

2023年9月1日(金) 10:00 ～ 11:00 RY205 (良心館2階 R Y 2 0 5 番教室)

[03心-ポ-41]大学テニス選手におけるスポーツ傷害の発生要因に関する検討

心理的競技能力からみた傷害発生について

*田島 勇人¹、和田 太一¹、丸茂 芙樹¹、大門 千紗¹、持田 慶貴¹、高橋 正則² (1. 日本大学大学院、2. 日本大学)

スポーツ傷害の発生要因については Andersen and Williams (1988) が「ストレスー傷害モデル」を発表しており、心理的要因からも、スポーツ傷害の発生を検討する必要性がある。そこで本研究では心理的競技能力に着目し、心理的競技能力の各因子・尺度と受傷の有無の関係を検討することを目的とした。調査対象は大学テニス選手男子35名とし、始めにプロフィールと DIPCA.3、J-PATEAに回答させた。その後、約3ヶ月間は毎日継続的に受傷の有無および受傷した際にはその詳細を報告させた。統計処理は、回答に欠損のあった1名を除いた34名について、受傷の有無別にみた心理的競技能力の各分析項目を比較した（対応のない t 検定）。次に DIPCA.3 と J-PATEA のそれぞれで受傷の有無を従属変数、心理的競技能力の各分析項目を独立変数とした変数減少法（尤度比）による二項ロジスティック回帰分析を実施した。その結果、DIPCA.3 のリラックス能力 ($p=0.03$)、J-PATEA の自己コントロール ($p=0.01$) で受傷者群は非受傷者群に比べ有意に低値を示した。また、DIPCA.3 を独立変数にした変数減少法（尤度比）による二項ロジスティック回帰分析の結果、抽出された因子はリラックス能力（OR、0.78； $p=0.04$ ；95% CI、0.60-0.99）であった。同様に J-PATEA で抽出された因子は自己コントロール（OR、0.62； $p=0.02$ ；95% CI、0.42-0.91）、客観性（OR、2.08； $p=0.03$ ；95% CI、1.07-4.06）、目標設定（OR、0.61； $p=0.12$ ；95% CI、0.32-1.14）であった。以上の結果より、大学テニス選手において傷害の発生には、DIPCA.3 のリラックス能力の尺度や J-PATEA の自己コントロール、客観性の因子が関係することが明らかとなった。

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別 | 体育心理学

体育心理学（奇数演題）／ポスター発表

2023年9月1日(金) 10:00 ～ 11:00 RY205 (良心館2階 R Y 2 0 5 番教室)

[03心-ポ-43]女子大学生アスリートの月経に対するイメージと認知的評価が 月経周期の身体的・心理的な月経随伴症状に及ぼす影響

女子大学生バレーボール選手を対象として

*菅野 慎太郎¹、小沼 直子²、宮内 育大³、高階 曜衣⁴、松尾 絵梨子³、黒澤 愛² (1. 日本大学松戸歯学部、2. 日本大学薬学部、3. 日本大学スポーツ科学部、4. 日本大学商学部)

月経は女性特有の生殖生理機能である。特に月経周期による女性ホルモンの変動は、女性アスリートの心身のコンディショニングを困難にさせる一因であり、運動パフォーマンスに影響を与えることが示唆されている

(2000, 藤原)。月経随伴症状には、前述した月経痛などの身体症状の他に、ストレス・憂うつといった心理的症状もあり、心身のコンディショニングにおける月経の影響を検討する上では両症状を含めて検討することが重要と考える。そして、月経随伴症状に影響を与える要因として、月経に対するイメージや認知的評価が月経随伴症状に影響を及ぼすことが示唆されている。そこで、本研究は女性大学生アスリートを対象に、月経に対するイメージや認知的評価が、月経周期に伴って引き起こされる身体的および心理的な随伴症状にどのような影響を及ぼすかを検討することを目的とした。対象者は、正常な月経周期を有する大学女子バレーボール競技者11名であった。対象者の月経に対するイメージや認知的評価の測定には、伊藤・杉本(2010)の月経イメージ尺度、佐々木ら(2014)の月経および月経随伴症に対する認知的評価尺度を用い、月経周期に伴う月経関連症状については秋山・茅島(1979)の月経随伴症状日本語版(日本語版 MDQ)を用いて評価した。そして、月経イメージと月経および月経随伴症に対する認知的評価の関係性について、Pearsonの積率相関係数を用いて分析を行った。その結果、月経に対する肯定的イメージと月経および月経随伴症に対するコントロール可能性に中程度の正の相関関係が認められた(いずれも $r < .60$, $p < .05$)。すなわち、月経に対して肯定的イメージを持っているほど月経に対するコントロール感を高く認知することが示唆された。大会当日は月経に対する捉え方が心理的・身体的な月経随伴症に及ぼす影響についての分析結果を発表する。

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別 | 体育心理学

体育心理学（奇数演題）／ポスター発表

2023年9月1日(金) 10:00 ～ 11:00 RY205 (良心館2階 R Y 2 0 5 番教室)

[03心-ポ-45]心理的介入プログラムが 個人競技の集団効力感に及ぼす影響

*西川 明花¹、笹場 育子² (1. 立命館大学大学院、2. 立命館大学)

本研究では、個人競技の中でも集団で行動している陸上パートに着目し、集団効力感の向上が及ぼす、行動や競技成績の変化について明らかにすることを目的として、体育会男女陸上競技部投擲パート9名に対し、約10か月間の心理的介入を実施した。集団効力感構成要素である、成功体験、代理経験、言語的説得の獲得を目的とした介入プログラムでは「集団効力感尺度」、「自己学習調整尺度」、「パート内意識調査」によるアンケート調査および、観察をもとにした行動変容と、競技成績による効果検証を実施した。本研究結果として、「集団効力感尺度」では、介入後に得点の低下がみられたが、有意差は認められなかった。背景として、陸上競技は協調性の高さが競技力を阻害する可能性があることから、集団効力感の向上が上手く機能しなかった可能性が考えられる。一方、言語的説得に着目した取り組みの効果として、個々の能力や役割を(再)認識でき、またその過程を共有したことによって、選手同士の相互理解につながった。その後、全員で課題の解決に向けて取り組むなど、多くの主体的、積極的な行動がみられるようになった結果「自己学習調整尺度」では、介入後に9名中6名の得点が向上したが、有意差は認められなかった。「パート内意識調査」では、集団効力感同様に全員のパート内の好感度や帰属意識が低下していた。最後に、本研究の集団効力感主要構成要素に着目した介入プログラムによって、練習時の成功体験や代理経験の獲得頻度が増加し、個々の技術向上につながったと考えられる。その結果、競技成績では9名中5名が自己記録を更新し、競技会における出場ラウンドも向上した。以上のことから、本研究の集団効力感を目的とした心理的介入プログラムの実施は、直接的な集団効力感の向上には繋がらなかったが、9名中6名の自己学習調整能力の向上と、9名中5名の自己記録更新など、個人の競技力向上に貢献した。

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別 | 体育心理学

体育心理学（奇数演題）／ポスター発表

2023年9月1日(金) 10:00 ～ 11:00 RY205 (良心館2階 R Y 2 0 5 番教室)

[03心-ポ-47]大学新入生におけるライフスキル獲得と自尊感情との因果関係の推定

*陳 昱龍¹、藤田 和樹² (1. 京都先端科学大学、2. 大阪大学)

【目的】本研究では、大学一年生を対象に、秋冬学期の開始時と終了時に収集した2波のパネルデータからライフスキル（以下、LSと略す）と自尊感情との因果関係を推定することを目的とした。

【方法】大学のSLS科目を受講した一年生541名に対してアンケート調査を行い、回答に欠損値のなかった203名（男性：157名、女性：46名、年齢：18.8±0.9歳）を解析対象とした。第1回目の調査(T1)は2022年度秋冬学期の開始時とし、第2回目の調査(T2)は、同年度の秋冬学期の終了時とした。本調査では、LSは島本・石井（2006）による日常生活スキル尺度（大学生版）を用い、自尊感情はMimura & Griffiths（2007）による尺度を用いた。統計解析はAmos17.0を用いて共分散構造分析を行った。

【結果】推定された交差遅れ効果から、LS獲得と自尊感情との因果関係を推定した。この結果、T1の「対人スキル」がT2の自尊感情に負の影響を与えることが示された($\beta = -.24, p < .01$)。

【考察】WITHコロナではインターネット上でのコミュニケーションの機会が多くなり、いわゆる「画面越し」のリモート環境では視覚的な手がかりが捉えにくいため、相手の意図を正しく見抜くことは対面によるコミュニケーションよりも難しいと報告されている（Kiesler, Siegel, & McGuire, 1984）。このため、大学一年生では、新環境への適応に加え、リモートによる対人コミュニケーションによりLS獲得のハードルが上がると予測される。さらに、リモートによる「顔だしなし」のコミュニケーション場面では、相手の表情やリアクションといったフィードバックがないため、他者に対する猜疑心や不信感が形成され、結果として自身の自尊感情に負の影響を与える可能性が示唆された。

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別 | 体育心理学

体育心理学（奇数演題）／ポスター発表

2023年9月1日(金) 10:00 ～ 11:00 RY205 (良心館2階 R Y 2 0 5 番教室)

[03心-ポ-49]JISS心理グループの過去20年間における個別心理サポートの実態調査

初回来談時のトップアスリートの主訴に着目して

*高橋 由衣¹、早川 琢也²、實宝 希祥¹、近藤 みどり¹、柄木田 健太¹、大西 壮流¹、立谷 泰久¹ (1. 国立スポーツ科学センター、2. 京都先端科学大学)

JISS開所以来、毎年一定数のトップアスリートが JISS心理グループの個別心理サポートを求めて来談している。我々の個別心理サポートを取り入れるアスリートは年々増え、心理サポートに対する需要が高まりつつある。一方で、心理サポートに対する偏見やネガティブなイメージは未だ散見され、アスリートが心理サポートを受けづらくなる原因の一つにもなっている。このような課題を解決するためには、我々が行ってきた個別心理サポートの知見を整理し、心理サポートの理解・普及・啓発に繋げていくことが早急に求められるだろう。そこで本研究では、過去20年間において JISS心理グループの個別心理サポートに来談したトップアスリートの心理的問題・課題の傾向を整理することを目的とした。研究対象者は、過去20年間において JISS心理グループの個別心理サポートに来談したトップアスリート322名であった。まず、個別心理サポートに来談したトップアスリートの属性を整理した結果、男性が41.0% (24.6±5.4歳)、女性が59.0% (23.9±6.3歳) の割合であることがわかった。次に、個別心理サポート申込票における主訴の項目を整理した結果、男性、女性ともに、試合での実力発揮（男性：75.8%、女性：71.1%）が高い割合を示した。次いで、競技生活での不安・焦り（男性：47.0%、女性：54.2%）、自分の性格や気分（男性：34.1%、女性：51.1%）が高い割合を示した（複数回答有）。これらの結果は、初回来談時に訴えるトップアスリートの心理的問題・課題の傾向であるといえる。特に、女性アスリートにおいて個別心理サポートの利用頻度が高かったことは、これまでの女性アスリートの活躍からも理解できる。今後は、トップアスリートが訴える主訴の背景にある心理的問題・課題等の分析を進めていき、心理サポートの普及・啓発を目指していきたい。

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別 | 体育心理学

体育心理学（奇数演題）／ポスター発表

2023年9月1日(金) 10:00 ～ 11:00 RY205 (良心館2階 R Y 2 0 5 番教室)

[03心-ポ-51]スタート局面におけるアルペンスキー選手の心理的特徴

*深見 将志¹ (1. 日本大学商学部)

アルペンスキー競技は、旗門で規制されたコースをより速く滑走することを目的とし、スタートからゴールまでの滑走タイムを競う競技である（近藤・竹田，2016）。その競技特性は、他者と滑走タイムを競い合うことを前提としていることから、滑走中のミスが勝敗に大きな影響を及ぼすことが示唆される。

国内外におけるアルペンスキー競技を扱った研究は、滑走スピードや技術、雪面の状況、滑走コースの地形等の要因に関する検討が主な研究テーマとなっている。他方、スタート直前の心理的状态に検討した報告はない。深見ほか（2017）は、大学生アルペンスキー選手を対象とした研究において、実力発揮を阻害する要因について「自身のスタートが近づくにつれて、焦りから不安感情が生じることにより自信の低下や緊張状態となる」ことを報告している。このことから、スタート局面における心理状態が滑走タイムに影響を及ぼすことが示唆される。しかしながら、これらの心理的特徴を生理的な指標から明らかにした研究はなく、検討の余地が残されている。そこで、本研究では、アルペンスキー選手を対象としたスタート局面の心理的特徴を生理的指標から検討することを目的とした。

本研究は、競技会に参加する大学生アルペンスキー選手11名を対象に、eVu-TPSセンサー（Thought Technology社）を用いた生体情報の収集および、得られたデータからスタート局面の心理的特徴を明らかにすることを試みた。具体的には、実験参加者の安静時および、練習時と競技会時のスタート直前のそれぞれに心拍変動及び皮膚コンセンダクタンスを測定した。3つの条件から得られたデータの平均値について分析を行った結果、競技会時の値が最も高かった。本研究の結果から、競技会における大学生アルペンスキー選手の生理的な特徴として、交感神経系の興奮がみられることが明らかとなった。

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別 | 体育心理学

体育心理学（奇数演題）／ポスター発表

2023年9月1日(金) 10:00 ～ 11:00 RY205 (良心館2階 R Y 2 0 5 番教室)

[03心-ポ-53]青年期アスリートの自己成長力とソーシャルサポート

アスリート育成における指導者の役割

*片上 絵梨子¹ (1. 共立女子大学)

[背景と目的] アスリートのメンタルヘルス維持を阻害する主な要因として、競技ストレス、個人ストレス、組織ストレスが挙げられている(IOC, 2021)。これらのストレス要因に関連する問題に直面した際、アスリートは自己調整や問題対処などによりメンタルヘルスを維持して問題状況の改善に向けて主体的に働きかけるだけでなく、その一連の経験を自らの成長に繋げていく力が求められる。自ら自分自身を伸ばしていこうとする力、すなわち自己成長力（速水ら, 1997）を身につけることは、競技内外で経験し得る様々な困難場面に対処しつつ、競技者としての能力を最大化させることにもつながる。本研究では、アスリートの自己成長力促進要因として指導者のソーシャルサポートに着目し、指導者の視点から自己成長力がパフォーマンスや競技生活に与える影響や、その過程における指導者及び周囲の他者の望ましい関わり方や役割を明らかにすることを目的とした。[方法] 中学生・高校生に10年以上の指導経験を持つ野球指導者2名を調査対象に選定し、半構造化面接を実施した。インタビュー逐語化データは、NVivoを用いたテーマ分析 (Braun & Clarke, 2006)を行った。[結果] 自己成長力を持つアスリートの特徴として、多面的洞察力（e.g.練習の狙いに気づく力）柔軟な発想力(e.g.応用的な情報転換力）、継続的な行動実行力（e.g.勤勉さ）、状況改善力（e.g.情報収集力）、変化に対する柔軟な態度（e.g.助言活用）などが挙げられた。また、自己成長力養成過程において重要な外的な要因としては、競技内外の多様な経験を促すこと（e.g.スポーツ以外の習い事）や競技環境の整備などが挙げられた。今後は調査対象者を増やし、得られた知見をもとにアスリートの自己成長力養成につながる指導者及び周囲の他者の過不足のない関わり方について検討していく。

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別 | 体育心理学

体育心理学（奇数演題）／ポスター発表

2023年9月1日(金) 10:00 ～ 11:00 RY205 (良心館2階 R Y 2 0 5 番教室)

[03心-ポ-55]拡張現実下における大きさ-重さ錯覚

*梅森 拓磨¹、渡邊 諒¹、井上 純輝¹、清水 海斗¹、樋口 貴広¹ (1. 東京都立大学大学院人間健康科学研究科)

【背景・目的】視覚情報が質量推測の重要な情報源であることを示す錯覚現象に、大きさ-重さ錯覚がある（Size-Weight illusion：SWI）。本研究では、現実の環境に CGや仮想物を追加して、現実世界を拡張する技術である拡張現実（Augmented Reality：AR）を用いた実験操作により、物体を視認してから持ち上げるまでの様々な段階で、物体の見かけ上の大きさを変化させた。これにより SWI が物体を持ち上げる前のどの段階の視覚情報に基づき生起されるのかを検討した。

【方法】一般成人25名を対象とした。参加者は、ヘッドマウントディスプレイ内の AR映像の仮想物を見てから、実物体のハンドル部をつまんで持ち上げ、その物体の知覚された重さを絶対マグニチュード推定法にて回答した。仮想物のサイズは2条件（大きいサイズの L 条件、小さいサイズの S 条件）とした。仮想物のサイズ変更に関して、物体持ち上げ課題の試行中、変更しない条件(no-size-change条件)、および、持ち上げ動作の開始直前、開始直後、終了後のいずれかの時点で仮想物のサイズを変更する条件（size-change条件）を実施した。

【結果・考察】 no-size-change条件において、S 条件では L 条件に比べて重たく知覚された。このことは、ARを用いた視覚刺激に対しても SWIが生起することを示唆する。また、size-change条件において、仮想物のサイズが動作開始前に L 条件から S 条件へと切り替わる物体を持ち上げた場合、L 条件のままの物体に比べて重たく知覚された。一方、動作開始直後や終了後にサイズ変更しても、物体は軽く知覚されなかった。これらの結果から、持ち上げ動作開始前の視覚情報に基づいて SWIは生起され、いったん動作を開始した後は、サイズ変更後のサイズに見合った SWIが起こるわけでないと考えられる。

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別 | 体育心理学

体育心理学（奇数演題）／ポスター発表

2023年9月1日(金) 10:00 ～ 11:00 RY205 (良心館2階 R Y 2 0 5 番教室)

[03心-ポ-57]対視覚刺激協調ダイナミクスと相対位相差の関係

*村岡 哲郎¹、竹下 大介² (1. 日本大学経済学部、2. 東京大学)

対視覚刺激協調ダイナミクスは個人内の体肢間協調ダイナミクスと類似した同調プロセスに制約されると考えられてきた。相対位相差0度（同相）及び180度（逆相）で協調関係は安定し、その安定性は同相で高く、同相・逆相以外の位相で協調を保つ事は困難となる。ただし、先行研究の多くでは往復する視覚刺激が用いられ、視点移動の制約はなかった。往復運動は特徴的事象である切り返しが協調ダイナミクスに影響を与えるため、特徴的事象のない円運動では異なる協調ダイナミクスとなる可能性がある。また、左右大脳半球間の情報交換は協調ダイナミクスに影響を及ぼすため、視覚刺激を片方の視野に提示してその対側体肢を動かす場合の協調ダイナミクスは視点移動を制約しない場合とは異なる可能性がある。そこで、円運動を行う視覚刺激を左視野に提示し、この視覚刺激と協調させて右手で円運動する際の協調ダイナミクスを明らかにする実験を行った。モニタ上に固定点Oと0.5Hzで円運動する点Pを映し、被験者（N=17）は点Oを注視した。点Pと協調させて右手を動かす（水平面上で回転板を回す）タスクは、点Pより90度先の位相で手を動かす、同相で動かす、90度遅れた位相で動かす、逆相で動かすという4条件とした。実験の結果、0度条件が90度及び180度条件よりも有意に協調動作が安定していた。また、0度及び-90度条件は90度及び180度条件よりも有意に協調動作が正確であった。これらの結果は、同相で協調関係が安定し正確であるという先行研究結果と一致したが、逆相と90度での協調ダイナミクスに差が認められないことと、-90度と同相についても差が認められないことは、先行研究結果と異なった。前者は、タスク難度が高い事によるフロア効果の影響が考えられた。後者は、-90度条件では視覚刺激が手運動到達目標として機能し、予測的制御を容易にしていた可能性が考えられた。

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別 | 体育心理学

体育心理学（奇数演題）／ポスター発表

2023年9月1日(金) 10:00 ～ 11:00 RY205 (良心館2階 R Y 2 0 5 番教室)

[03心-ポ-59]心理的競技能力診断検査(DIPCA.3)を用いたラグビーチームにおける実態調査

*友定 啓仁¹、佐藤 達哉²、笹場 育子² (1. 立命館大学大学院、2. 立命館大学)

運動部活動のようにスポーツを扱う集団において、勝利を追求する姿勢は否定されるものではない。しかし、近年スポーツ界では低年齢化が進み、過剰な勝利至上主義によりバーンアウトなど多くの心理的な問題が生じている(勝, 2021)。本研究では、大学体育会ラグビー部の心理的な課題を明らかにし、心理的能力の強化を促す方策を考えることを目的とした。A大学ラグビー部68名を対象に、心理的競技能力診断検査(DIPCA.3)を用いたアンケート調査を実施し66名から回答を得た。学年とスコッドを独立変数とする被験者間の2要因分散分析の結果、自信において学年の主効果($F(3, 54)=3.32, P=.03$)のみに有意な差が認められた。多重比較の結果、1-3回生間に有意な差がみられ、学年が上がるごとに得点は低下していた。また、DIPCA.3について、探索的因子分析(最尤法、プロマックス回転)を行った結果(サンプルサイズ=66, 変数=12, 因子=2)、第1因子は予測力、決断力、判断力、自信、自己実現意欲、闘争心、勝利意欲、協調性、忍耐力など、試合中の意思・行動の決定に関わる項目から構成されていることから決定力因子、第2因子は自己コントロール能力、リラックス能力、集中力など自制に関する項目から構成されていることから精神力因子と名付けられた。さらに、探索的因子分析によって算出された因子スコアを従属変数とした2要因分散分析を行ったところ、決定力因子においてスコッドの主効果($F(3, 54)=2.28, P=.09$)で有意な傾向がみられた。心理的能力の強化を促すための方策として、DIPCA.3による自信の得点が低かった3回生の半数以上が所属する下位チームにおいて、より多くの達成体験の獲得を目的とした試合数増加が有効であると考えられた。また、因子分析から抽出された決定力因子についても試合を通して向上する可能性が考えられた。

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別 | 体育心理学

体育心理学（奇数演題）／ポスター発表

2023年9月1日(金) 10:00 ～ 11:00 RY205 (良心館2階 R Y 2 0 5 番教室)

[03心-ポ-61]他者の不安表情の知覚が実践的な運動パフォーマンスに及ぼす影響

*小川 茜¹ (1. 西日本短期大学)

他者の感情が伝染する現象は情動伝染として知られているが、情動伝染と運動パフォーマンスの関係を調べた研究はまだ少ない。本研究では、他者の不安表情を知覚することで生起する不安の情動伝染と実践的な運動課題における運動パフォーマンスの関係を調べた。実験参加者13名に、前方床に設置した的へ向けてボールを下手で投げる的当て課題を行わせた。ボールを投げる直前に他者の不安表情を見る不安条件を10試行、中性表情を見る中性条件を10試行行わせた。情動伝染生起の確認のため、主観的指標として質問紙を用いて不安感情を測定し、生理指標として表情筋（前頭筋、皺眉筋、大頬骨筋）の筋電位を測定した。運動パフォーマンスは的の中心を5点として中心から遠くなるに従い4～0点として測定した。分析の結果、中性条件よりも不安条件において不安感情が有意に高い傾向が認められた。また運動パフォーマンスは中性条件よりも不安条件において有意に低い傾向が認められた。表情筋の筋電位に関しては前頭筋、皺眉筋、大頬骨筋のいずれにおいても有意差は認められなかった。以上より、他者の不安な表情を見ることで不安感情の情動伝染が生起してボールの下手投げという運動パフォーマンスが低下する可能性が示唆されたものの、主観的指標と生理指標の不一致も確認される結果となった。

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別 | 体育心理学

体育心理学（奇数演題）／ポスター発表

2023年9月1日(金) 10:00 ～ 11:00 RY205 (良心館2階 R Y 2 0 5 番教室)

[03心-ポ-63]不安がパフォーマンスに与える影響

野球競技の制球力に着目して

*有井 大芽¹、早田 剛²、菅生 貴之¹ (1. 大阪体育大学、2. 環太平洋大学)

【目的】本研究では、不安が野球競技の投球パフォーマンス（制球力）に与える影響について検討することを目的とした。【方法】被験者は現役で硬式野球競技を行っている男子学生16名 (平均年齢 20.31 ± 1.16 歳)とした。測定項目として心理面では、不安の指標として水口ほか（1970）による日本語版状態-特性不安尺度（State-Trait Anxiety Inventory, 以下 STAI）を用い、特性不安、状態不安の2項目を測定した。パフォーマンス面である制球力の測定は、ストライクゾーンを9分割した際の4隅と中心それぞれに番号を割り振り、被験者には指定した場所をねらい投球を実施させた。指定した場所と実際に投球をした場所との2点間の直線距離を、Frame-DIAS V（株式会社DKH）を用いて解析し制球力とした。投球数は指定場所（5か所）に各1球ずつ投球を行い、統制条件では18.44mの距離での制球力の測定（計5球）を実施し、実験条件では18.44m, 12.44mの2つの距離で制球力を測定（計10球）した。実験条件では、被験者の不安を高めるための環境設定として、被験者全員での観察、不安を高める声かけ、順位づけ、報酬用いた。それぞれの条件での制球力を比較することで、不安が制球力に及ぼす影響を検討した。【結果・考察】統制条件の状態不安得点高低による群別に、各条件での制球力で対応のない Mann-Whitney の U 検定を行った。その結果、実験条件12.44mでの制球力において、不安低群が有意に高い値（ $p < .05$ ）を示した。しかし、統制条件18.44、実験条件18.44mの制球力では有意な差は見られなかった(n.s.)。Hardy et al（2010）の研究において、課題難易度を下げていく条件において不安高群で大きなパフォーマンス向上が報告されており、本研究においても先行研究を支持したことが考えられる。

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別 | 体育心理学

体育心理学（奇数演題）／ポスター発表

2023年9月1日(金) 10:00 ～ 11:00 RY205 (良心館2階 R Y 2 0 5 番教室)

[03心-ポ-65]ジャグリングにおけるボール軌道視認の重要性

バーチャルリアリティ環境下で実現した3ボールカスケードを対象として

*井上 純輝^{1,2}、渡邊 諒²、清水 海斗²、梅森 拓磨²、樋口 貴広² (1. ソニーグループ株式会社、2. 東京都立大学)

ジャグリングの遂行には、視覚情報に基づくボールの空間位置の把握が重要である。視線研究によると、パフォーマーは自身が投げたボール軌道の頂点付近を見ていることから、特に重要な情報源であると推察される。発表者らは、バーチャルリアリティ(VR)技術と3Dモーションキャプチャ技術を統合し、VR環境下で現実のボールを使ったジャグリングができるシステムを開発した。ジャグリング中にボール映像を一定時間遮断することで、頂点付近のボール軌道をどの程度視認できることが重要なのか検証した。

ジャグリング経験者2名を対象とした。対象者はヘッドマウントディスプレイ（HMD）を装着した状態で、ジャグリングの基本課題である3ボールカスケードを20回継続することが求められた。HMD上では、手の映像がHMD内蔵カメラの情報に基づいて実際の手と同じ位置に、ボールの映像が3Dモーションキャプチャの情報に基づいて実際のボールと同じ位置に提示された。実験条件は、全てのボール軌道が見える1条件、頂点付近でボール映像が一定時間遮断される4条件とした。

実験の結果、遮断時間が300ms以上の条件において継続回数が著しく減少した。この結果は、頂点付近の300ms程度の視覚情報が、ボールの落下軌道予測に重要なフィードバックを提供し、投球や捕球タイミングの調整に不可欠である可能性を示唆した。また、ヒトの瞬きに要する時間が200ms程度であることから、200ms程度の視覚遮断であればボールの軌道予測を補完できる可能性が示唆された。

本研究で開発したシステムは、VR環境下で現実のボールを用いたパフォーマンスを可能とし、その汎用性が期待される。今後の研究では、他の運動やスポーツにおいても重要な視覚情報を実験的に探索する。更に、VR技術を用いた実践的なトレーニングツールの開発を通じて、運動パフォーマンスの向上やスポーツ教育への応用を目指す。

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別 | 体育心理学

体育心理学（奇数演題）／ポスター発表

2023年9月1日(金) 10:00 ～ 11:00 RY205 (良心館2階 R Y 2 0 5 番教室)

[03心-ポ-67]注意の種類の違いが強度の異なる有酸素性運動中の身体的きつさに及ぼす影響

*若田部 舜¹、余 浩鑫¹、菅谷 亮介¹、本田 真澄¹、小島 翼¹、林 容市^{1,2} (1. 法政大学大学院スポーツ健康学研究科、2. 法政大学文学部心理学科)

【背景】本研究は、有酸素性運動中の身体的きつさが、注意の種類と運動強度の違いによってどのように変化するかを明らかにすることを目的とした。【方法】成人健常男性11名（ 22.5 ± 2.0 歳）を対象に、4つの注意条件×3つの運動強度（40%、50%、60% VO_{2max} ）を用いた計12回の10分間のサイクリング運動を実施した。10分間のサイクリング運動中、呼気ガスデータを連続採集し、それに加えて、身体的なきつさ（RPE）を測定した。注意条件として、運動中の身体情報に注意を向ける条件（associative条件）、モニタに注意を向け特定の単語が出てくる回数を数える条件（visual条件）、流れてくる音声に注意を向け、特定の単語が聞こえてくる回数を数える条件（audio条件）、指示のない条件（control条件）の4条件を設定した。実施する運動の強度および注意条件は対象者ごとにランダムに設定した。運動中に測定した VO_2 、HR、およびRPEに関して、対象者の個人差を変量効果、注意条件と経過時間を固定効果とする二要因分散分析を混合モデルで各運動強度ごとに分析した。【結果】運動中に測定した VO_2 、HRおよびRPEに関して、40% VO_{2max} でのサイクリング運動時にのみ、注意条件の有意な固定効果が認められた。RPEに関して、visual条件と比較して、control条件の方が有意に高い値を示し、また、visual、audio条件と比較して、associative条件の方が有意に高い値を示した。【結論】外的注意によるきつさ軽減の効果は、運動強度の増大に伴い小さくなる可能性がある。また、外的注意によるきつさの軽減は、呼吸循環器系反応の変化によって生じる可能性が示唆された。

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別 | 体育心理学

体育心理学（奇数演題）／ポスター発表

2023年9月1日(金) 10:00 ～ 11:00 RY205 (良心館2階 R Y 2 0 5 番教室)

[03心-ポ-69]野球の審判員における心理的スキルと審判経験年数および年齢との関係

*西貝 雅裕¹、来田 宣幸² (1. 太成学院大学高等学校、2. 京都工芸繊維大学)

【緒言】スポーツの審判員は、試合中に発生する様々なプレーに対して、素早く適切にジャッジしなければならない。審判員も競技選手と同様に心理的なスキルが必要と考えられ、審判員を対象とした心理面のサポートや研究が進められている。野球では、2015年に審判資格制度が開始され、制度発足当初の報告では、審判経験年数と心理的スキルの間に有意な正の相関がみられた。近年、心理面に対する意識も高まりつつあり、心理的スキルに与える要因を確認する必要がある。そこで本研究では、審判資格別に審判の心理的スキルと審判経験年数および年齢との関係を明らかにすることを目的とした。【方法】調査対象者は254名の野球審判員であった（資格なし：62名、2級または3級：58名、国際資格または1級：134名）。調査には審判の心理的スキルを評価するために作成された質問紙を用いて、自己コントロール、表出力、意欲、自信、コミュニケーション、集中力の6因子に関連する各4項目に対する回答の合計を心理スキル得点とした。【結果及び考察】資格を持たない審判員では、自信以外の5因子で審判経験年数と有意な正の相関がみられ、表出力及びコミュニケーションで年齢と有意であった。2級または3級では、自己コントロール及び集中力で審判経験年数と有意であり、自己コントロールで年齢と有意であった。国際または1級では、自己コントロール及びコミュニケーションで経験年数と有意であり、年齢とは有意な相関は得られなかった。2019年の報告と比べて、より上位の資格を有する審判員ほど、年齢や経験年数との関係がみられなかった。このことは審判員の心理的スキルに年齢や競技経験以外の要素がより強く影響していることを示し、心理的な要因について学ぶことの重要性がうかがわれ、審判員に求められる心理的スキルについて情報提供することも大切といえる。

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別 | 体育心理学

体育心理学（奇数演題）／ポスター発表

2023年9月1日(金) 10:00 ～ 11:00 RY205 (良心館2階 R Y 2 0 5 番教室)

[03心-ポ-71]大学女子バスケットボールの新入生アスリートにおけるシーズン中のストレッサーとスポーツ傷害発生との関連性

唾液アミラーゼ値と主観的気分を指標として

*東 亜弓¹ (1. 大阪国際大学)

本研究では、バスケットボール部に所属している大学女子新入生アスリート7名を対象とし、シーズン中のスポーツ傷害発生と生理指標、主観的気分について、シーズン前のストレッサーとの関連性を探索的に明らかにすることを目的とした。調査期間は、2022年5月から11月で16回測定を実施した。分析には、「通常」、「春の公式戦1週間前」、「春の公式戦2週間後」、「秋の公式戦1週間前」、「秋の公式戦中」、「秋の公式戦2週間後」の6つの時期に群分けを行った。急性ストレスの程度を評価するために、唾液アミラーゼモニター（ニプロ(株)）を使用し唾液アミラーゼ値（KU/L）を用いた。ストレッサーを評価するために、「大学生アスリートの日常・競技ストレッサー尺度」（岡ほか, 1998）を用いた。また、主観的気分を測定するために POMS2短縮版（金子書房）を用いた。その結果、シーズン中に受傷した選手は7名中2名（28.5%）で、発生時期は7月(足関節捻挫)と10月(肩関節亜脱臼の疑い)であった。シーズン前のストレッサーとシーズン中の総合的気分状態（TMD）との相関分析の結果、「春の公式戦2週間後」と「他者からの期待・プレッシャー」（ $r=.93$ ）、「自己に関する内的・社会的変化」（ $r=.87$ ）に有意な正の相関が示された。また、シーズン前のストレッサーとシーズン中の唾液アミラーゼ値との相関分析の結果、「春の公式戦1週間前」と「日常・競技生活での人間関係」（ $r=.95$ ）との間に有意な正の相関が示され、「通常」と「クラブ活動内容」（ $r=.94$ ）との間にも有意な正の相関が示された。シーズン中の TMDと唾液アミラーゼ値には、有意な相関関係は示されなかった。本研究では、シーズン中にスポーツ傷害が発生した選手との関連性は示されなかったが、ストレッサーと生理的・心理的指標との関連性が示唆された。

ポスター発表（専門領域別） | 専門領域別 | 体育心理学

体育心理学（奇数演題）／ポスター発表

2023年9月1日(金) 10:00 ～ 11:00 RY205 (良心館2階 R Y 2 0 5 番教室)

[03心-ポ-73]打鍵音に埋め込まれたピアニストの打鍵動作

*山寺 由乃¹、池山 洋子²、島 弘幸³、木島 章文² (1. 山梨大学大学院 生命医科学専攻、2. 山梨大学教育学部、3. 山梨大学生命環境学部環境科学科)

ピアノの打鍵動作において、熟練者は体幹の動きに依存して生成される力量をうまく打鍵に利用できるが、未熟練者は腕や指などの抹消部分が自発的に発揮する力に頼りがちである。本研究では熟練者が弾いた2つの音：1) 体幹から生ずる動作依存力で弾いた音（A音）と2) 故意に発生させた末梢部分の筋張力で弾いた音（B音）とを音楽経験が異なる2群に提示し、弁別能力に関する群間差を確認した。演奏経験が豊富なピアニスト1名に対してイ音を生成するように依頼した。まず肩から力を抜き、指先を固くして自重を指先に乗せ、さらに打鍵の直後に指の力を抜き、指の付け根で自重を支えるようにA音を30回打鍵させた。次に上肢全体に力を入れ、さらに手首から先のみで強く打鍵させるようにB音を30回打鍵させた。音楽経験者8名（E群）と音楽未経験者8名（I群）に対してA音とB音を乱順で提示し、あらかじめ提示したA音と同質か異質かを手元のキーで応答させた。正誤FBを与えずにPre-testを行わせ、続いて正誤FBを与えながらtraining課題12回を3ブロック、最後に再び正誤FBを除去してPost-testを行わせた。Pre-testとPost-testの双方でE群の誤答は皆無であった。一方、I群のPre-testの成績は60%程度に留まったがPost-testの成績は80%程度まで向上した。演奏家は作曲家の残した楽譜の情報を頼りに楽器を演奏し、作曲家が意図した音楽を再現する。このとき演奏家は聴きながら弾くことで、生成される音をイメージした音に合わせて瞬時に修正する。E群の弁別能力の優位はこうした演奏・訓練経験に基づくものと考えられる。一方でI群に見られた有意なトレーニング効果は、打鍵を伴わない音聴取のみの心理訓練で音の知覚・生成能力を鍛えられることを示唆する。